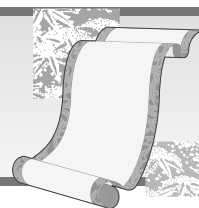


軍記物語の女性たち(4)

しずか ぎ ぜん
静御前ぎ けい き
『義経記』 より

岡崎 嘉彦



静御前は平安時代末期から、鎌倉時代初期に生きた女性で、白拍子として名を馳せ源義経の愛した女性として知られている。際立った美貌と絶妙な舞で当代随一の白拍子と評されていた。源氏の若き武将義経とやがて静は出会い、恋に落ちていく。義経が平家征討で活躍して都での評判が高まるにつれ、弟の勢力拡大を危惧する兄源頼朝との関係が不和になっていく。ついに、鎌倉で義経追討が決せられると、都にいた義経は鎌倉方の勢力に堀川の館を攻められる。しかし、静の機転によりこの危機を脱し、義経は静を伴って西国へと逃れていく。その後、静は奥州へ向かう義経に同行して畿内へ戻り、雪深い吉野山で義経と生き別れてしまう。そして、静は鎌倉方によって囚われの身となり、詮議を受けるため母の磯禪師と共に頼朝の元へ送られる。

文治二年(1186)年四月、静は頼朝に鶴岡八幡宮社で白拍子として舞うことを命じられる。それに従って静は、

「吉野山 峰の白雪 ふみわけて
入りにし人の跡ぞ恋しき」
「しづやしづしづのをだまきくり返し
昔を今になすよしもがな」

と義経を慕う歌を唄い頼朝を激怒させるが、頼朝の妻の政子が「夫を慕う本心を形にして幽玄である」と趣き深く味わいがある静を取り成し、命を助けた。この時、静は義経の子を身籠もっており、そのことを知った頼朝は女子なら助けるが男子なら殺すと命じた。やがて、静は男子を産み懸命にその子を守るうとしたが、赤子は由比ヶ浜に沈められてしまう。京に帰され、傷心に浸る静のその後の消息は杳として知れない。

静は、義経との出会いを境に波乱で悲運な運命へと誘われていく。彼女の華やかで雅なイメージとは裏腹に、彼女の人生は謎に包まれている。出生から義経との出会い、そして最期についても明確に記したものはなく、静終焉の地も諸説が残る。

一説では、北海道の姫川に身を投げたとも、

由比ヶ浜に入水したともいわれている。また、中世を代表する軍記『平家物語』にも静については僅かに記述されているのみで、彼女のその後について書かれた箇所を見出すことはできない。

だが、静は中世の女性として有名な人物で前述のようにその伝承も全国各地に存在しており、人気の高さを伺い知ることが出来る。では、なぜ静が時代を超えて民衆から愛され続け、現代でも語り継がれているのだろうか。その理由は、義経の戦における英雄的な活躍と共に、義経の愛情を受けた彼女の生き方にあったのではないだろうか。義経と出会い、波乱の生涯を歩みながら義経を一途に想い続けたにもかかわらず、添いとげることが出来ずに、恥を忍びながらも鎌倉へ送られてしまう。そして、義経との愛息も将来の禍根を残す事を理由に頼朝によって殺され、悲劇的な運命を背負わされた静は、多くの民衆や人々からの強い同情を得ることとなる。特に、頼朝の御台所である政子は静に対し、寛容的で鶴岡八幡宮での頼朝から命じられた歌舞へ憐れみの情を示し、男子が生まれたときには頼朝に赤子の助命嘆願をしている。冷徹な性格の政子だが、静を擁護する振る舞いが目立つ。このように、静は政子にとっても同情心を駆りたてる女性であったといえる。

平家を滅亡させた最大の功労者である義経が、平家追討の為に共に戦った兄頼朝に殺されてしまうという悲運の英雄として後世に語り継がれる上で、静はなくてはならないほど重要な存在であった。混沌とした時代背景の中、それまでの人生全てを義経に捧げた静の一途さは、当時の女性ならではの美しさがあったのではないだろうか。

主な参考文献、そして、今回おすすめする図書
村上學編『義経記・曾我物語』国書刊行会
日本文学研究大成刊行会監修 平成五年。

おかざき よしひこ(司書・情報サービス課)